

日本学術会議 課題別委員会
自然災害軽減のための国際協力のあり方検討委員会
人材育成・国際ネットワーク分科会（第3回） 議事要旨 文責：斉藤

日 時：平成22年8月6日（水） 12：00～13：00

場 所：日本学術会議6階 6-C（3）会議室

出席者：（委 員）中埜，小谷，田村，斉藤，（オブザーバー）古川（小委員会委員），
（事務局）鳥生，（欠席）大町，今村，田中

提出資料 ・ 前回（第2回）議事要旨（案）
・ 3-1 元研修生アンケート集計結果（古川）

議事内容

1. 前回議事録確認

- ・ global → 二国間 → regional の一方向の流れにする。
- ・ サイエンスだけでなくエンジニアリングの内容であれば，学問として general に成立するのではないか。地方色の強い Non-engineered Construction を Global に教育することは難しい。
- ・ 事務局に田中とあるのは，田中委員（土木研究所）のことなので，オブザーバーに変更する。

2. 提出資料に対する意見交換

資料 3-1（古川）

- ・ 今年の6～7月に元研修生に対して実施したもので，まだ集計途中である。送付先は連絡がつく約700名。いまのところ回答は188名から得ている。
- ・ 資料3-1のp.1のa欄はIISEEの教育をVery usefulと回答した者であり、b欄はUsefulと回答した者である。
- ・ 大学勤務者数だけでなく政府の役人になっている人は？
→ 何名が要職に付いている人はいるが，完全に把握はできていない。

3. 風防災に関する人材育成・国際ネットワークについて（田村）

- ・ 国際風工学会が中心になって，昨年6月に国連の防災関連組織なども加わった風防災の国際協力グループIG-WRDRRができた。
- ・ 東京工芸大では風防災に関する短期研修員制度（3ヵ月程度）やインターンシップ制度がある。
- ・ サイバーインフラを利用した「VORTEX-Winds」という，世界14機関からなる仮想的工学組織があり，風工学に関する教育，研究，高度な設計を実現させるための人的・物的資源を補完共有することを目的としている。最終的には強風災害を低減するためのもので，発足して3年目になる。
- ・ VORTEX-Windsは英語が中心だが，現地の普及のためには現地語で教育しなければならないのが課題。
- ・ 風被害調査・復旧に対する取り組みは？
→ 日本から出かけることもあるが，地震ほど多くない。現地の人に行ってもら

こともある。ボランティアベースになる。

- ・国際風工学会のメンバーは、各国の風工学会である。各国学会の事務局長のところに情報がいく。個人会員制度はない。
- ・IG-WRRR が提供しているハイチが地震被害を受けた状態でハリケーンシーズンを迎えるにあつたっての風防災パンフレットは復興に使われているのか？
--> 身を守るための注意や簡易な補強に関する情報であり、恒久的な復興のためではない。パンフレットは、フランス語と英語と両方がある。
- ・風の研修プログラムの特徴は
--> 風の成因については地域性があるが、気象学的な知識としては普遍的である。
一方、風被害の大半は外装材の被害、あるいはそれに端を発するものであり、ほとんどがノンエンジニアドのものである。
- ・竜巻への対策は、米国など海外でどのように進んでいるのか？
--> 個の建物が遭遇する確率は極めて低いので、人命を守ることが第一。
米国や日本では予報の研究が進んでいる。竜巻のときの避難方法などの教育が必要である。
日本と米国は国土面積に対する竜巻の頻度は同じ。規模は異なる。
竜巻による死者数がもっとも多いのはバングラディッシュで、住宅に多用されているトタンが飛散して人に危害が加わる。
バングラディッシュでは村を廻る劇団の演目に防災があるなど、草の根の活動も行われている。
- ・サイクロンシェルターのような避難場所をたくさん作ればよいのでは？
--> 竜巻は予報が成されない限り、避難場所にむかう時間的余裕は殆どない。現状での予報の精度は低い。身近なところに避難場所（地下室など）を作ることが大切である。
- ・東京工芸大での研修の対象者は、どのような人か？
--> 大学生が多い。企業で働いている方もいる。
- ・日本としての国際防災戦略となると、相手国の気象庁の人などを教育することが必要ではないか。
- ・日本人の国際分野で働くような若手の育成は？
--> 東京工芸大では1週間程度のアドバンススクールを海外で行っている。
- ・地震も風も、ノンエンジニアドの住宅を対象とした教育が難しい。
- ・リスク評価はできても対策はなかなか進まないのが現状。日本側が対策面でもお金を出せるとよい。

4. 次回までの宿題

- ・前回同様に、全体会議の講演資料4編を見直して、人材育成と国際ネットワークの観点から参考になる点、補足する点などをまとめたメモを作成する。
以前のものに付け加える形でもよい。

5. 次回日程（予定）

- ・9／13の全体会議後に開催（予定）

以上